

リクルーティングの観点から見た超短期プログラムの受け入れ： JST さくらサイエンスプランと吉林大学夏季研修を例に

国際教育交流センター教育交流部門

伊 東 章 子

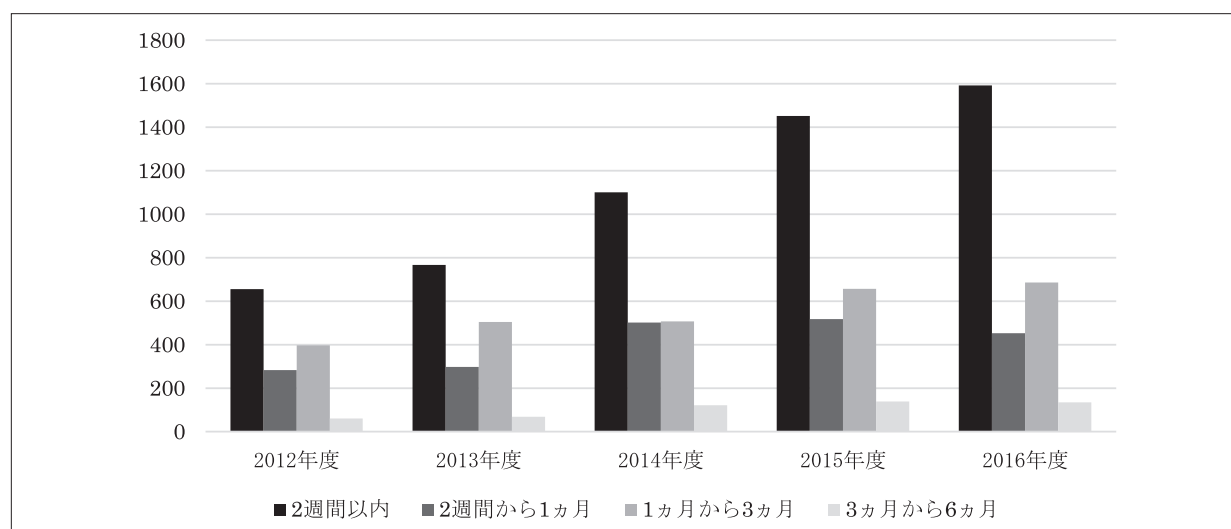
1. 近年の「超短期」プログラムをめぐる動向

近年、日本の多くの大学が1週間から1ヵ月以内という極めて短い期間の受け入れプログラムを積極的に企画・運営している。日本学生支援機構（以下 JASSO）が、滞在期間が3か月以上でかつ留学の在留資格を取得するものを短期プログラムと見なしていることを受け、滞在期間が3か月未満のプログラムを超短期プログラムと呼ぶことがある¹。しかしより最近の動向をみると、超短期の枠組みの中でも特により短いプログラムによる受け入れが活発化しており、3か月以内のプログラムを一様に超短期と呼び習わすのも難しいほど、プログラムが多様化している。JASSO が毎年行っている「短期教育プログラムによる外国人学生受入状況調査結果」によると、プログラム期間が①2週

間以内、②2週間から1ヵ月、③1ヵ月から3ヵ月、④3ヵ月から6ヵ月の短期プログラムのうち、最も大きな伸びを示すのが①2週間以内のプログラムである。直近の過去5年間（2012年度から2016年度）では、2週間以内のプログラムによる受け入れ数が大学院学生で2.4倍に、学部学生で2.5倍に増えている²。

近藤は従来型とも言うべき6ヵ月以上1年未満でかつ単位取得を目的とする短期プログラムに対する超短期プログラムの優位性として、在籍校へのカリキュラムの影響が少ないこと、煩雑な留学ビザの手続きが不要なこと、また参加費が安価であること、さらには留学希望の学生が有する多様なニーズに対応しうる柔軟性などをあげている。これらは確かに留学生、つまりは超短期プログラム参加者から見た優位性ではあるものの、一方で受入側の視点から見た「なぜ極めて短い

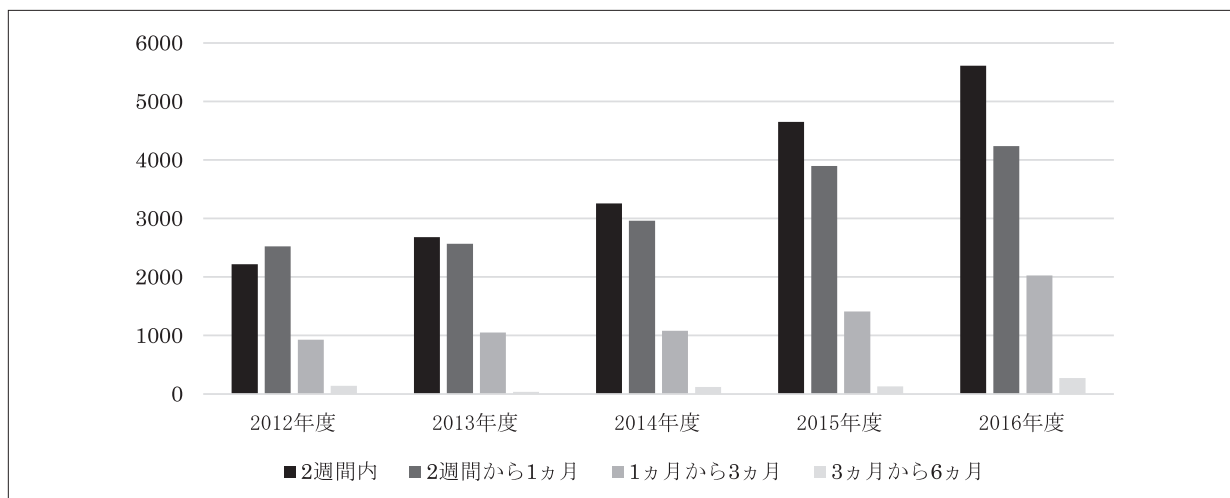
〈表1〉短期教育プログラムによる大学院生受入数の推移



¹ 近藤佐知彦「21世紀型『超短期』受入プログラム開発：30万人時代の受け入れ構築にむけて」、『大阪大学留学生センター研究論集』2009年

² 独立行政法人日本学生支援機構「短期教育プログラムによる外国人学生受入状況調査」https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_p/index.html（2018年5月15日閲覧）

〈表2〉短期教育プログラムによる学部学生受入数の推移



*表1, 2ともにJASSO「短期教育プログラムによる外国人学生受入状況調査結果」に基づき作成。

期間の受け入れなのか」という動機については十分に説明し得ていない。超短期プログラム、特に1ヵ月以内のプログラムについては従来の単位取得を目的とした短期プログラムなどとは受け入れ制度やノウハウにおいて異なる点が多く、大学としては新たなプログラムを立ち上げる目的や意図を明確にしておかなければ、超短期プログラムを継続的に運営することは容易ではないだろう。

名古屋大学国際教育交流センター教育交流部門では、2016年度より超短期プログラムの企画・受け入れを行うこととなった。プログラム立ち上げに際して、目標として設定したのが、次に繋がるプログラム作りである。プログラムを通して参加者たちが名古屋大学の教育・研究環境に対する理解を深めることで、将来的により長期の留学プログラムや大学院進学などでまた名古屋大学に戻ってきてもらう、つまりはリクルーティングに寄与するプログラムの企画・運営である。以下、本報告では教育交流部門が2016年度から行っている日本科学技術振興機構（以下JST）によるさくらサイエンスプランと、本学全学間協定校である吉林大学からの夏季研修の受け入れについて紹介する。

2. JST さくらサイエンスプラン

さくらサイエンスプランとは、JSTによる「日本・

アジア青少年サイエンス交流事業」である。「産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深める」ことを目的に、2014年度から募集・採択を始めた。招聘される学生らにはJSTより往復航空券、日本滞在費（宿泊費、食費、日本国内交通費）などが支給されるという充実した支援内容である。日本の受け入れ機関にも海外の送り出し機関にも、さらには参加者自身にも金銭的な負担がなく学生交流が図れることから、毎年多数の日本の大学・研究機関、企業、行政機関が同プランへ応募している。2014年度から2016年度の3年間で、JSTはさくらサイエンスプランにより海外の1,051もの送り出し機関より12,687名を日本へ招聘している。2018年現在で対象国はアジア・太平洋地域の35ヵ国であるが、過去の招聘実績をみると中国からの参加者が全体の36%を占めている（次いでタイの11%、ベトナムの8%）³。

さくらサイエンスプランの招聘対象は高校生、学部生、大学院生、ポスドクなどの若手研究者と大変幅広く、さらに日本での活動内容によって「科学技術体験コース」、「共同研究コース」、「科学技術研修コース」などに分類されている。そのため、さくらサイエンスプランと一口に言っても、実際のプログラム内容は非常に多岐にわたり、個別化を図ることが可能である。とは言え、これまでに採択された過去の実施計画をみ

³ 国立研究開発法人科学技術振興機構・2018年度パンフレット『さくらサイエンスについて』https://ssp.jst.go.jp/pamph/pr_pamph2018.pdf (2018年5月15日閲覧)

ると、やはり突出して多いのが、かねてより研究交流実績のあった日本の大学とアジアの大学の研究室(者)が共同で企画・申請し、日本の大学や研究施設に相手先の学生と引率教員を招聘するケースである。いわば既存の研究交流活動をベースに、さくらサイエンスプランによって研究室(者)間の交流を一層強化・促進しようとする取り組みである。通常、外部資金などを獲得して研究者間の行き来は可能でも、学生の派遣や招聘ともなると資金の目途がつかない場合が多々ある。青少年に着目したさくらサイエンスプランは、この点において研究室(者)から見ると自由度が高いばかりか、次世代を担う人材にチャンスを与えるという意味において、非常に意義のある事業であると言える。

名古屋大学でも、2014年度、2015年度に学部や研究室主体でいくつかのプログラムが申請・採択されていたが、2016年度に向けて中国の協定大学から、本学中国交流センターを通じて、相次いでプログラムの共同申請の要請があった(筆者が中国の大学の国際交流担当者から聞いた話によると、中国・科学技術部より中国の主要大学宛てに日本の大学とのさくらサイエンスプランを積極的に推進するようにと要請があるようである)。教育交流部門では過去4年間中国におけるリクルーティング、特に本学の協定校からの大学院進学者のリクルーティングに力を入れてきた⁴。そのため、これら取り組みの一環として、さくらサイエンスプランを中国の協定校との関係強化ならびに日本に関心のある優秀な学生へのアウトリーチの機会として捉えたのである。さくらサイエンス運営委員会などの学内議論を経て、2016年度に3件、2017年度に2件国際教育交流センターからさくらサイエンスを申請し、採択を受けた。

具体的なプログラムの企画・運営としては、まずは教育交流部門と中国交流センターとが、中国の協定各校との交流実績や今後の事業計画などを考慮して、その年のさくらサイエンスプランの相手校を決定する。相手校が決まれば、相手校の要望を聞きながら、個別のプログラム案を作成する。2016年度と2017年度に教育交流部門が申請し、採択されたさくらサイエンスプランは以下の通りである。

〈2016年度〉

同済大学(2016年10月17日-10月23日)

「環境と調和した持続発展のための社会環境工学・自動車工学研究の視察」

参加者：学部学生10名、引率教員1名

ハルピン工業大学(2016年11月6日-11月12日)

「ハルピン工業大学学生による物理・化学・生物分野の大学院国際プログラムと世界先端研究の視察」

参加者：学部学生10名、引率教員1名

南京大学(2017年3月6日-3月12日)

「南京大学学生による物理・化学・生物分野の大学院国際プログラムと世界先端研究の視察」

参加者：学部学生10名、引率教員1名

〈2017年度〉

同済大学(2017年10月16日-10月22日)

「環境と調和した持続発展のための社会環境工学・自動車工学研究の視察」

参加者：学部学生9名、引率教員1名

中国科学技術大学(2017年11月27日-12月3日)

「情報技術で優しい人間社会の実現を目指す先端的な研究の視察」

参加者：学部学生10名、引率教員1名

ここでは2016年度と2017年度に実施した同済大学とのプログラムを例にあげ、詳細を見てみよう。同済大学は、土木建築・環境分野で中国随一の大学であり、本学とは同分野で以前より交流実績があった。これに加え、同大は自動車工学分野でも評価が高く、本学の強みとも共通している。このことから、同済大学で学ぶ学生が、本学の大学院進学や、その後の研究留学などに関心を持つ可能性が高いと考えた。プログラムの大枠を教育交流部門で作成するとともに、同済大学国際交流担当者には中国交流センターを通じて参加者の専攻、学年、英語能力などの受け入れ基準を伝え、学生の推薦を依頼した。参加希望学生には全員英文のStatement of Purposeの提出を求めたため、特に英語

⁴ 一例として、中国の協定校における模擬講義を活用したリクルーティングを継続的に実施している。伊東章子「大学院リクルーティングにおける模擬講義の活用：名古屋大学『名大巡講』の試み」ウェブマガジン『留学交流』2016年6月

能力に優れ、研究意欲の高い学生が選抜される結果となった。Statement of Purpose は参加学生の具体的な研究関心を知る上でも非常に有益で、なるべく個々の学生の関心に合致する研究室に研究室訪問や講義の聴講などを協力依頼することができた。参加学生にとっては、自分の関心のある分野の研究室を訪問したり、同じ分野を学ぶ学生たちと一緒に授業に参加したりすることで、将来自分が名古屋大学で学ぶ姿を具体的にイメージすることができるし、また協力してくれる研究室にとっても、単なる物見遊山のような学生よりも、熱心に専門的な質問をしてくれる学生の方が受入甲斐があるのは当然のことである。受入にかかる作業は教育交流部門で全て分担し、各研究室には研究室訪問や講義の聴講などの対応のみをお願いした。資料1は同済大学とのさくらサイエンスプランのスケジュールである。

毎回プログラムの最終日には総合討論会の時間を設けている。ここでは参加学生が自らの専門分野を踏まえながら、滞在期間中に学んだ内容についてプレゼンテーションを行う。本学からは関係教員や大学院生が参加し、個々のプレゼンテーションをもとに意見交換を行ったり、プログラムの全体テーマについて幅広いディスカッションを行ったりする場となっている。この振り返りおよび討論の時間を設けることで、プログラム期間中の自身の学びを収穫として実感でき、結果としてプログラム全体に対する満足度が高まっている。さくらサイエンスプランをリクルーティングの一環として考える場合、この満足度をいかに高めるかは非常に重要である。参加学生にとってプログラムが面白かった、または有意義であれば、名古屋大学そのものも肯定的に評価するし、その逆であれば名古屋大学は留学先の選択肢から外れることになるだろう。

これ以外に、プログラム上には記載がないが、空き時間を利用して各研究科の国際化推進担当教員（留学生担当講師）による学部・研究科の紹介時間を設け、留学プログラムの紹介や、進学相談などを行っている。プログラム終了後に相談のメールが届くこともあるので、帰国後のフォローアップも随時行っている。教育交流部門ではこれまで5回のさくらサイエンスプランで約50名の学生を受け入れてきたが、参加者のほとんどが本学での研究に強い関心を持ち、実際に本学大学院を受験し、その後入学する学生なども現れている。また、送り出し機関である中国の協定校とは、さくら

資料1：2017年度さくらサイエンスプラン「環境と調和した持続発展のための社会環境工学・自動車工学研究の視察」（同済大学）スケジュールの概要

1日目	AM	来日、名古屋着
	PM	<ul style="list-style-type: none"> ■ オリエンテーション ■ キャンパスツアー ■ レセプション
2日目	AM	<ul style="list-style-type: none"> ■ ノーベル賞受賞記念室および関連3施設の視察（野依良治教授記念館、ES総合館、赤崎記念研究館）
	PM	<ul style="list-style-type: none"> ■ トヨタ自動車技術者による講演 ■ 環境学研究科研究室訪問 ■ 工学研究科研究室訪問
3日目	AM	■ トヨタ会館およびトヨタ工場の見学
	PM	■ 工学研究科大学院授業の聴講
4日目	AM	<ul style="list-style-type: none"> ■ 中央図書館見学 ■ 環境学研究科大学院授業の聴講
	PM	<ul style="list-style-type: none"> ■ 環境学研究科研究室訪問 ■ 未来社会創造機構実験室訪問 ■ 未来材料・システム研究所研究室訪問
5日目	AM	<ul style="list-style-type: none"> ■ 環境学研究科大学院講義の聴講 ■ 減災館見学
	PM	<ul style="list-style-type: none"> ■ 総合討論「環境と調和した持続発展のための社会環境工学・自動車工学研究の行方」 ■ フェアウェル・レセプション
6日目		名古屋城、豊田産業技術記念館見学
7日目		帰国

サイエンスプランの受け入れにより、一段と交流が活発になった。さくらサイエンスは協定校における本学の認知度を高めることにも貢献していると言える。教育交流部門では今後も中国交流センターと連携を図りながら、さくらサイエンスプランによる受け入れを進める予定である。

3. 吉林大学夏季研修

さくらサイエンスプランがJSTによる招聘事業を活用した超短期プログラムであるのに対し、吉林大学夏季研修は送り出し機関である吉林大学からの参加費によってプログラムを運営している。プログラムの内容も独自のものを用意する完全なテラーメイド型のサマープログラムである。吉林大学は中国国内でも最大規模の総合大学であり、昨年度は「双一流」のA類にも選ばれている（「双一流」に選ばれている大学は全体のトップ5%で36大学のみ）。本学と吉林大学との交流協定は1985年からと歴史が長く、息の長い重点的な交流が続けられている。吉林大学は2009年に、中国全土でわずか11校のみが採択された中国政府による

「基礎学科英才教育計画プロジェクト」の実施校に選出され、物理・数学および生物・化学の優秀班（Honor Program）を立ち上げた（毎年約1万名の新入生から70名のみが選抜されるという特別カリキュラムだという）。名古屋大学が受け入れを行っているのは、この選抜クラスの学生を対象とした夏季研修である。

吉林大学ではそれまでも夏季休暇を利用して、選抜クラスの学生を積極的に欧米の有力大学に派遣していたが、名古屋大学と緊密な協定関係にあること、またノーベル賞受賞者を輩出する本学の研究環境を学生に体験させたいとのことから受入依頼があった。学内で受入方法について議論を行った結果、物理および化学を専攻とする学生を5名ずつ、合計10名を招き、2週間のプログラムを企画・運営することとなった。上述したように、受入にかかる全ての費用を吉林大学が支出している。2016年に第1回目を、2017年度に第2回目を、名古屋大学および吉林大学ともに夏季休暇にあたる毎年7月末から8月上旬に実施した。資料2にプログラムの概要を示す。

プログラムの中心は物理、化学分野の研究室訪問である。2016年度、2017年度ともに導入レクチャーと13の研究室訪問、そして名古屋大学関係者とのノーベル賞受賞研究についての学習会が組み込まれている。ここで詳細を記載するのは控えるが、かなり多彩な研究室の顔ぶれを用意している。各研究室での活動時間はおおよそ2時間で、具体的な研究室での活動は個々の研究室が決定している。主な活動としては、研究室で行われている研究内容のプレゼンテーション、研究分野に関するレクチャー、実験設備や実際の実験の見

学、大学院生との交流会、模擬実験への参加など、どの研究室も趣向を凝らして吉林大学学生のために準備をしてくれている。さくらサイエンスプランと同様に、各研究室には研究室訪問への対応のみをお願いしていて、受入にかかるその他負担は一切かからないようになっている。

吉林大学からの参加学生は、中国の学年歴で2年生時を修了し、夏休み明けの新学期から3年生にあがる学生である。これより早い段階での参加だとまだまだ専門知識に乏しく、上記のような研究室訪問を理解・消化できない可能性が高い。またこれより遅い段階での参加だと、既に進路に目星をつけてしまっている学生が多くなっていくことから、リクルーティングという観点からは効果が薄くなってしまいかねない。さらには、近接する物理・化学分野の様々な研究に触れ、後々の専門分野の選択にも活かして欲しいというこちら側の願いもあり、受入学年を2年生修了時と決定している。実際に、参加者からは本研修への参加を通じて、自分が学びたい研究分野が見つかったという声が毎年寄せられている。受け入れを担当する者としては、これ以上に喜ばしいことはないだろう。

吉林大学夏季研修の特色としては、日本語・日本文化講座を3コマ、さらには日本文化体験講座を1コマ設けていることがあげられる。リクルーティングの観点から試験的に導入してみたのだが、参加者から思いのほか好評である。選抜クラスが英語学習にも力を入れているために、どの参加者も2年生修了時ながら英語運用能力は高い一方で、日本語にはこれまで触れたこともないような学生ばかりである。名古屋大学を含

資料2：吉林大学夏季研修のプログラムの概要

				1日目	2日目	3日目	4日目
午前					オリエンテーション	名古屋市内観光	自由行動
午後				名古屋着	研究室訪問1 ----- 歓迎会	自由行動	
	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目
午前	日本語・日本文化講座	日本語・日本文化講座	日本語・日本文化講座	研究室訪問5	研究室訪問7	エクスカージョン	自由行動
午後	導入レクチャー 研究室訪問2	研究室訪問3 日本文化体験	研究室訪問4 赤崎記念館見学学習	研究室訪問6 ノーベル賞記念展示室見学学習	研究室訪問8		
	12日目	13日目	14日目	15日目			
午前	研究室訪問9	研究室訪問11	研究室訪問13	帰国			
午後	研究室訪問10	研究室訪問12	修了式および送別会				

めて、今や日本の大学の多くが日本語能力を必要としない学位プログラムを提供しているが、それでも日本に留学する場合には入試の面でも、入学後の研究・学習の面でも、生活の面でも、日本語能力があるに越したことはない。ゼロ初級3コマの日本語授業がきっかけになり日本語を本格的に学習したり、日本語・日本文化の学習を通じて日本が身近に感じられることで、日本留学を希望する動機になってほしいと望んでいる。

参加学生は帰国後、吉林大学において本研修の報告会を開催している。名古屋大学滞在中に学んだことや、特に関心をもった研究内容についてレポートをまとめ、クラス内で発表するそうである。その発表の抜粋を本学側にも送ってきてくれるのだが、ほとんどの学生が夏季研修で学んだ内容を熱心に報告してくれているようである。一部を抜粋すると、「名古屋大学の教授や大学院生はみんな研究熱心で、研究に対する姿勢に感動した。研究室の雰囲気も素晴らしい。」「模擬実験に参加させてもらい、簡単な実験だと思ったが、内容が興味深く、様々な視点から考察する必要性を痛感した」、「名古屋大学の研究室はどれも研究環境が優れていて、ここでならどんな研究も行えると思った」、「物理と化学が密接な関係も持っていることを教えてもらい、他の専門分野にも関心が広がった」など、本研修が参加学生にとって大変有意義だったことが伝わってくる。本研修を機に日本に留学したいと希望する学生もいて、中には訪れた研究室に早速コンタクトを取り、進学について相談をする意欲的な学生もいた。さらには報告会に参加した後輩学生たちが先輩学生に触発され、翌年自分も参加したいと希望することも多いそうである。

本研修については、受入研究室からも概ね好意的な意見が寄せられている。英語のできる優秀な学生との交流が研究室のメンバーにとって良い刺激になる、または優秀な学生を研究室に呼び込むきっかけになるとの評価が多い。吉林大学夏季研修は今年度以降も継続して開催予定であるので、参加者と協力研究室双方にとって実りのある機会になるよう、教育交流部門とし

ては今後も吉林大学と連携を取りながら受け入れ作業を進めていく予定である。

4. おわりに

以上で教育交流部門が2016年度から取り組んでいる二つの超短期プログラム、さくらサイエンスプランおよび吉林大学夏季研修について簡単にとりまとめた。この2年間に教育交流部門で受け入れた学生は延べ70名ほどとなるが、既に過去の参加者が本学のより長期の交換留学プログラムに応募したり、大学院を受験したりするなど、次に繋がるというリクルーティングの効果が現れ始めている⁵。今後学年が進行すればより手ごたえが感じられるのではないかと期待している。

一方でプログラム運営に課題も見えている。一番の課題は研究室訪問に協力してくれる研究室を見つけることである。多くのさくらサイエンスプランのように、既存の研究室（者）間の研究交流を土台にしたプログラムであれば、研究室探しが問題になることはないだろう。しかし教育交流部門にとっては、研究室はもろろん部局とも直接的な結びつきがないため、最もハードルが高い作業である。日頃から各部局の国際化推進教員を中心に、留学生を積極的に採用する教員や国際交流に前向きな研究室などの情報収集を続けることが重要である。それと同時に、教育交流部門として国際化の推進が科学系研究を行う部局にとって喫緊の課題であることを訴えていかなければならない。そのうえで、研究室側からみた超短期プログラムのメリット、つまり受け入れにかかる作業の負担が少なく、進学意欲が高く優秀な学生との交流の機会が気軽に得られることを訴求する必要があるだろう。

教育交流部門では2018年度もこれら二つの超短期プログラムを継続予定である。本学協定校からの参加学生、そして協力研究室の両者にとって満足度の高いプログラム作りを行うべく受け入れ準備を進める。

⁵ さくらサイエンスなどの超短期プログラムを実際に受け入れてみて、超短期プログラムを外国人留学生獲得のために有効な手段だと位置づける大学が増えている。一例として、佐々木直子ほか「JST さくらサイエンスプランを活用した協定校との交流—ハルビン工程大学の場合」ウェブマガジン『留学交流』2017年6月